

グローバル・コスモポリタン社会における「アジア経済」の位相 —アーティスティックな消費者行動と多元的なボランティア・ セクターの意義を中心として—

佐藤 研 一*

1. 問題の所在
2. アーティスティックな消費者行動
3. 多元的なボランティア・セクター
4. 「アジア」と「経済」の行方

鮎と言え、一般に水を切れればすぐに死んでしまうという印象を与えている。だから、非常にひよわな魚のように思われているが、その実、鮎は俎上にのせて頭をはねても、ぼんぼん踊り上がるほど元気発刺たる魚だ。そればかりか、活きている中はぬらぬらしているから、これを掴んで串に刺すということだけでも、素人には容易に手際よくゆかない。ましてこれを体裁よく焼くのは生やさしいことではない。

—北大路魯山人

1. 問題の所在

「経済」ないし「経済過程」もまた、あらゆるものと同じく、一般的印象の類と実際との間に大きなズレが生じ、そもそも相当に扱い難く、ましてや、思い通りに「料理」することなど至難の技といってよいものであろう。そして、専門家でさえ「体裁良く仕上げる」ことは、容易なことではない。ましてや、その「変動」の最中においては、なおさらのことであろう。

マイケル・サンデルが問いかけた、あらゆるものの「商業化」への批判もまた、こうした眼差しの下で、再考される必要がある（Sandel 2013）。

そこには、二度にわたる「変動」が関与している。ダニ・ロドリックは、「経済学」に関する「厚い記述」といってよい試みのなかで、サンデルの『それをお金で買いますか』での批判を取り上げて、サンデルの指摘に一理はあるとしつつも、その時代依存性に基づいた相対化を視野に、モン

* 国士舘大学 21世紀アジア学部 教授

テスキュー等、「資本主義の大成功」直前までの「商業」をめぐる「言説」に触れている (Rodric 2016)。

ロドリックは、アルバート・ハーシュマンの『情熱と利害 — 大成功以前の資本主義をめぐる政治学的な考察』での議論に基づいて、モンテスキューらは、「商業」こそが、人々を温和にし、誠実にし、思慮深くし、上品にするといった、「資本主義の大成功」以後とは似ても似つかない評価がなされていたことを指摘する (Rodric 2016; Hirshuman 2013)。

ロドリックは、サンデルの批判の主旨を「市場やインセンティブへの依存は、社会的目的を害する腐敗した価値観を助長する」ことへの批判だとしているが、こうしたモンテスキュー等の見識との対称性は明らかである。両者の間に「変動」が介在するばかりでなく、「経済」や「経済過程」、この場合はいうまでもなく、「資本主義」やそれにとまなう「商業化」をめぐる「一般的印象の類と実際との間に大きなズレ」を起因とする問題の次元もまた、横たわっているように思われる。

おそらく、19世紀以降の「資本主義の勝利」の前後での違いとは、クリフォード・ギアツが「文化と社会変動」のなかで指摘した「経済過程」をめぐる「エコノミズム (経済偏重主義)」の台頭と相関する (Geertz 1984)。そして、現在進行中の「グローバル・コスモポリタン社会」への移行という「変動」が加わる。

「資本主義」を含む、「文明」以降の、「商業」や「市場」、つまりは、「経済過程」自体には、実質的な「豊かさ」をもたらす側面があり、「商業」の進展による「豊かさ」の回復の実感自体もまた、心のゆとり、穏和な態度やマナーを産出する基盤となってきたはずである。「資本主義の大成功」以降の「経済偏重主義」の台頭は、「経済過程」についての「一般的印象」や「言説」やそれらを前提とした「批判」の類に、大きな変容を運命づけ、サンデルの議論も、リーマン・ショックに関係した金融関係者の志向性も、こうした変容の帰結のそれぞれひとつにあたろう。「経済過程」は、その他の一切から自律しており、「お金儲け」をめぐる次元だという「一般的印象」を排除しない、「言説」の帰結ということになる。

いうまでもなく、「資本主義大成功」の前後で、「経済過程」をめぐる「言説」の転換、「パラダイムシフト」が生じたように映るということであり、具体的には、「経済学」の「政治経済学」からの自立などもまた、こうした転換の帰結のひとつであろう。

さて、リチャード・ボールドウィンが、『大いなる収斂』のなかで、こうした「経済過程」の「変動」をめぐる、人類史的な視野の「経済史」的な見識の下、今日までの大きなトレンドについて簡潔に述べている。

ボールドウィンによれば、19世紀初頭に、K.ポメラントが指摘する「大分岐」が生じたのと同様に、現在、「大収斂」と呼ぶべき、壮大な「経済過程」の「変動」が生じており、「大分岐」によって、それまでの4000年以上に及ぶ「経済過程」を覆した新たなそれを、今度はわずか100年ほどの時を挟むだけで、改めて覆そうとしているということになる。「大分岐」が貿易コストの低下に由来するとすれば、「大収斂」の方は、情報コミュニケーション技術の発達によってもたらされるとされ、前者では、それまで豊かであった「アジア」とヨーロッパとがその位置関係を逆転させ

たのに対して、後者では、「大分岐」後の「豊かな国」の世界経済に占める割合が既に1914年レベルにまで差し戻されているとされている（Baldwin 2017）。

ボールドウィンは、「豊かな国」を具体的には、「G7」を念頭に論述しているが、過去30年ほど間での「新興市場国」の台頭は、実は、「G7」側の思惑による「バリューチェーン」の移転・拡大が原因であり、その結果、資源需要が飛躍的に高まって、その他のより「貧しい国」にもまた、「経済成長」の機会がもたらされたと論じる。こうした変化の基底にあるのが、「ICTの世界でおきた革命」に端を発する、「コネクテッド・ワールド」の創発である。ボールドウィンは、こうした変化が、自身のいう、「第二のアンバンドリング」を発生させ、「情報の伝達コスト」が劇的に下がり、そうした「バリューチェーン」の「新興市場国」への移転・拡張が、経済学的な論理によって自然と生じたと述べている。加えて、ボールドウィンは、さらに「第三のアンバンドリング」が起きることも確実であり、これまでの基本的な原則を大きく転換せざるをえない、こうした新たな状況に対して、当然のことながら、これまでとは大きく異なる「言説」の変容が生じることを強く意識している。

このように、18世紀以降においてさえ、「経済過程」とそれをめぐる「言説」の「変動」が、少なくとも2度は生じており、「経済学」成立以降の今日においてもなお、個々の「経済過程」やそれをめぐる「言説」自体も、実は、十分に相対視され、再検討されるべきものであることがわかるように思われる。

ボールドウィンが描くような新たな「経済過程」を、ここでは、「ニューエコノミー」と呼ぶことにすると、「ニューエコノミー」は、これまでの「経済学」が対象としてきた「経済過程」とどこまで異なり、新たな「言説」さえ創発する可能性があるのかどうかという問題について考えてみる必要性が見えてくる。

さらにいえば、新たな「経済過程」は、社会変動の一面をなすものであるとすると、その社会的位相が劇的に変貌し、同時に、全ての社会的次元、領域において、劇的な変容が認められるということでもある。そうした社会変動の先の社会類型を「グローバル・コスモポリタン社会」と呼んだアンソニー・ギデنزが繰り返し述べているように、グローバル化は、「経済過程」の変動のみの事象だと狭小にとらえてはならないのであり、もし仮に、そのようにとらえようとするのなら、ギアツが指摘する「エコノミズム（経済偏重主義）」に陥っているのではないのかということを疑う必要があることになるだろう（Giddens 2003）。

実は、ボールドウィンの議論では、驚くことに、地球温暖化にともなう気候変動の問題でさえも、「春雨程度の問題」でしかないのだとして、問題視されていない。ボールドウィンの関心は、やはり一流のエコノミストの鑑に相応しく「経済学」の範疇を、見事に逸脱していないのである。こうした態度こそは、プロフェッショナルのなかのプロフェッショナルとしてのエコノミストの矜持であるのと同時に、社会学的な関心からすれば、紛いもなく、「エコノミズム（経済偏重主義）」の典型例であるというほかはあるまい。「エコノミズム（経済偏重主義）」は、結局のところ、未知の「経済過程」に対して、無条件に、既知の「経済過程」を対象とする「言説」を適用しようとする

ることと同義であり、「ミスマッチ」に向けてゴリ押しを行うことにほかならないのである。

「アノマリー」に対して、別の「言説」「モデル」へのシフトを検討すべきだとする見地に立てば、ボールドウィンの説明でさえも、「積極的惰性」の類であることを疑う必要がある。ボールドウィンの議論では、気候変動の問題などを見事に「外部化」させて、「エコノミズム（経済偏重主義）」的な議論を可能にすることに成功しているように映る。「アノマリー」を正面に据えた取り組みの回避といってもよい。

様々な論者が、「アノマリー」に向き合いながら、多くの場合、結局のところ、新しい見解と抱き合わせで、古い「言説」との紐帯を保持しようと必死になっているように映る。ボールドウィンの場合は、「貿易」などへのこだわりを捨て、「コネクテッド・ワールド」における「経済過程」に議論の焦点を移すという新たな見解を持ち込む一方で、気候変動などの問題を切り捨てて、あくまでも、経済学者・エコノミストの職責に照らせば当然のことにすぎないだけのことはあるが、これまでの「エコノミズム（経済偏重主義）」的な「言説」の範囲内での整合的に説明の完遂への執着を感じさせているのである。別の表現をとるならば、「原理主義」的な態度とさえいえるかもしれない。

蛇足ながら、申し述べれば、こうした「捨象」の操作は、きわめて学術的な価値をもつことにほかならないが、それは、この場合であれば経済学的な次元での諸要因などを特定するために価値があるとういことなのであって、当該事象の一切を経済学的次元に還元しようとする点に価値があるわけではない。こうした「捨象」の操作は、むしろ、その後、社会学や人類学など他分野の成果との相互連携のための第一歩でもありうるものだと考える。それぞれの分野の分析が純化すればするほど、逆説的ながらそれぞれをつなぐことに意義が生まれてくるからである。本稿の問題意識はこのことにある。

特にこの論文では、場合によっては、それぞれ独立的に扱われはするが、現在進行中の消費者行動の変化、ボランティア・セクターの台頭、そして「アジア経済」という、何れにせよ、既存のエコノミズム的な「言説」からすれば「アノマリー」といっても差し支えない三つの事象について、こうした問題意識の下で敢えて検討を試みることにしたい。なぜならば、こうした検討を通して、「グローバル・コスモポリタン社会」下の「経済過程」としての「ニューエコノミー」の具体的な素描の可能性が、実は高くなるのだと考えているからにほかならない。

2. アーティスティックな消費者行動

筆者が、戦後日本でのお洒落な生活用品としての「雑貨」への関心の高まりの軌跡に注目してモデル化し、2000年代以降のウランバートル、タシケント、バンコク、上海等での消費者行動のトレンドへの妥当性を検討したものが、「アーティスティックなライフスタイル」という論点である。

消費者行動が成熟化、高度化するにつれて、その傾向はアーティスティックになっていくというのが、その要点といってよい。そして、こうした消費者行動のトレンドは、グローバル化が進行するアジアの諸地域で確認可能ではないかと論じてきた（Satoh 2018）。

アーティスティックであるということは、結局のところ、モノ自体の消費から、時間の消費へとその力点が移動することであり、単にモノを買うというよりは、コーディネートやアレンジ、その消費を附加することで実現する自らの生活体験そのものをいかに演出するのかという、スタイリストやファッションデザイナー、舞台演出家や映画監督、テキスタイルデザイナーや染色作家、建築デザイナーやインテリア・デザイナー、彫刻家や画家、音楽プロデューサーや音楽監督のようなアーティストの営みに限りなく接近していく傾向を指している。消費そのものよりもアイデアを構想したり、試行錯誤に費やす時間そのものの方が重要なプロセスへの変化とってよい。スローフード運動やスローライフの考え方ともある程度重なる傾向のものでもあるが、もっと多元的な傾向であり、当初は、ファッションや食事などへの関心からスタートするにしても、次第に、インテリアやアート、雑貨、キッチンやバスルームのすたいるや使い方、恋愛のかたち、家族のあり方、葬儀のスタイルなどなど、ライフスタイルそのもののデザインという、きわめてアーティスティックな姿勢での取組に向かって進む傾向なのである。マズロー由来のモデルとは、やや異なるトレンドをイメージするものであり、また、際限のない消費者行動の傾向モデルとも一定の距離があるものでもある。

アメリカでのマーケティング研究の領域で注目を集めた、「LOHAS」発案の母体でもある、社会学者のポール・レイらが提示した「カルチュラルクリエイティブ層」の消費者行動の傾向は、いうまでもなく、日本、中国を中心とした東アジア、タイ、シンガポールに焦点を当てた東南アジア、さらには、中央アジアにおける調査に基づく、筆者が「アーティスティックなライフスタイル」とする傾向ときわめて近い (Ray and Anderson 2001)。「カルチュラルクリエイティブ層」の消費者行動の傾向をあらわすキーワードは、「LOHAS」ということになるが、高所得、高学歴のエキスパートを中核とするとされる「カルチュラルクリエイティブ層」は、エコフレンドリーな消費に積極的であり、また、オーガニックな食材を好み、スローフード運動に共鳴し、アートやカルチャー系の活動などにも熱心に時間を費やす傾向があるとされる。また、レイによれば、アメリカ同様の「カルチュラルクリエイティブ層」が、欧州でも台頭しているとされる。

こうした欧米での「カルチュラルクリエイティブ層」のトレンドと筆者のいう「アーティスティックなライフスタイル」に見られるトレンドとの間に違いがあるとすれば、前者が、政治運動や社会運動やスピリチュアルな運動などへの関心がきわめて高いとされる点にあるように思われる。こうした点に関しては、アジアで見られる「アーティスティックなライフスタイル」のトレンドでは、きわめて淡泊であり、生活そのものを愉しむトレンドとしての性格が強いものといってよい。

例えば、日本の「スターバックス」でのコンセプトの変化にこうした傾向の違いを見てとれるように思われる。日本は、「スターバックス」の海外展開の最初のケースだとされるが、進出当初は、そのコンセプトは、「フェアトレード」や「環境保護運動」などへの共鳴が前面に出され、店内にはこの手の配布物が並んでいたものだが、現在ではこうしたコンセプトは前面からは消え、かわりにグルメ系統のメッセージがアーティスティックな感覚でアピールされるようになってきている。

さて、こうした、欧米での「カルチュラル・クリエイティブ層」が強くもつとされる、反戦や、

人権、環境、スピリチュアルなものへのかかわりなどのトレンドが、「アーティスティックなライフスタイル」と不可分に示されることの原因は、必ずしも明確ではないが、少なくとも、レイの研究でも明らかなように、アメリカの「カルチュラル・クリエイティブ層」の形成過程のスタートが、公民権運動や反戦運動などへのかかわりにあることと深いかかわりがある。

とはいえ、「アーティスティックなライフスタイル」の傾向そのものにも、少なくとも、エコフレンドリーで、平和主義的で、アーティスティックな感覚の延長上のスピリチュアルなそれへの親和性といった性格が潜在していることは確かである。その意味で、アジアにおける「アーティスティックなライフスタイル」の拡がりもまた、新たな「生活のかたち」の形成の一プロセスとしての顔をもつのだといってもよいかもしれない。「パリ協定」以降の世界にあって、「カルチュラル・クリエイティブ層」が「闘う」対象自体が、達成による消失の過程に入るなかで、新しい時代の課題を共有する新たな「ライフスタイル」として、アジアにおける傾向と欧米でのそれが収斂する状況が、生じつつあるようにも映るからである。

「グローバル・コスモポリタン社会」に向う「ニューエコノミー」の進展のなかで、マーケットにおける消費者主導の傾向が指摘され、そこには、「ニューエコノミー」特有の、ネットにつながった「経済過程」の特異性のほかに、ここで指摘してきたような、成熟化した消費者行動との相乗効果が横たわっていることになる。今後の展開が現実味を増してきた、消費者自身が高度化した3Dプリンターなどを駆使して自ら好みのものを生産するという「プロシューマー」型のものづくりが標準化や、再生可能エネルギー主軸のシステムへの移行などが具現化されれば、こうした傾向は、著しく進展をみることになるだろう。

また、地球温暖化にともなう気候変動や海面上昇への対応、プラスチックゴミ問題や宇宙デブリ、大気汚染に水質汚染、森林破壊や資源など様々な環境問題への取り組みとの関連かも、「アーティスティックなライフスタイル」と呼べるような、消費者行動の高度化、成熟化が、アジアにおいても、さらに促進されることになるだろう。「持続可能な発展・開発」の具体像は、このようなライフスタイルの進展のなかで、具体化されてくるように思われる。

最後に、もう一点論じておきたい点がある。「底辺からの直接的な移行の可能性」とでも呼ぶべき点である。

この論点は、こうした「アーティスティックなライフスタイル」などの傾向は、先進国、それも、比較的恵まれた人々の間に見られる消費者行動のトレンドにほかならず、多くの貧しい人々のそれとは、全く異質のものであるという見方への問題提起にほかならない。

「アーティスティックなライフスタイル」の究極の高みは、「優雅」ではあるにせよ、結局のところ、自然再生可能エネルギーをベースに、キャンドルライトや星空にも助けながら、自然の恵みを活かし、創造力豊かにスローで、ナチュラルな暮らしを実現することにあるとしたら、こうした暮らしのかたちは、アフリカ大陸や中央アジアの一部などで暮らす、経済指標的には最底辺の人々のそれとの違いは驚くほど小さい。

「ニューエコノミー」の進展がもたらす、「ビッグ・プッシュ」ではなく「スモール・ナッジ」(リ

チャード・ボールドウィン)で、十分可能な新たなシステムの浸透傾向もまた、両者のわずかな違いを取り除くのにきわめて有効であることはいうまでもなからう。

そして、こうした消費者行動の高度化、成熟化は、これからの「生活のかたち」を、次に取り上げる、多元的なボランティアセクターでの動きと、おそらくは車の両輪のように、特徴づける傾向に直結するものように思われる。

3. 多元的なボランティアセクター

エリック・ブリニョルフソンのような経済学者でさえ、「ニューエコノミー」の進展のなかで進むAIなどによる「自動化」の波への精確な認識をもちつつも、現在の「アノマリー」に対して、「積極的惰性」ともとれる、「経済学者としては労働がなくなるということを認めるわけにはいかない」といった趣旨の立場を明示している。「労働」こそが人間の「生きがい」なのだというのである。

しかし、ジェレミー・リフキンの革新的な議論(Rifkin 2015)が的を射ているかどうかにかかわらず、「ニューエコノミー」にともなう「自動化」などが、単に「失業」に直結し、したがって「ベーシックインカム制度」の導入の検討を検討にのみつながら問題系としてとらえるのではなく、むしろ狭義の「労働」からの解放の可能性に関する問題系にもつながるという視点をももつべきなのではないだろうか。

こうした問題意識の下で真に重要になってくるのが、「ボランティア」の問題であることはいうまでもなからう。「労働」からの解放後に、人生を充すのは、「アーティスティックなライフスタイル」であり、「ボランティア」であり、敢えて区別すれば、スポーツや芸術やゲームなどにかかわる活動であり、グローバルなエコシステムの改善にかかわる様々な次元の活動などであろう。

「ボランティア」は、こうした全ての領域、次元にかかわる可能性があり、その意味で、きわめて多元的なものである。アジアをはじめ、賃金をとまわなない「労働」は、むしろ、歴史的には標準といった方がよいものであり、十分「生きがい」となりうるものである。同時に、きわめて社会的な意義をとまうものであり、これまでも、「環境問題」にせよ「人権問題」にせよ、きわめて重要な人類的課題が、広義の「ボランティア」活動によって牽引されてきたことはいうまでもない。

今後、プラスチックの使用規制や温暖化対策が実行力のあるかたちで遂行されたとしても、既に拡散された「ゴミ」の撤去など、数十億の人々が数世代にわたって「ボランティア」活動に従事するに十分な規模の課題が山積みである。「労働」からの解放は、環境負荷の軽減と環境問題への対応・処理活動の増大という二重のプラスを生む可能性がある。

1990年前後以降から、ピーター・ドラッカー、フィリップ・コトラー、ヘンリー・ミンツバーグといった経営学の泰斗が、「資本主義」の行方を論じているが、こうしたなかで、ミンツバーグは、ボランティア・セクターの重要性に焦点を当てて論じている(Drucker 1994; Kotler 2015; Mintzberg 2015)。ミンツバーグは、ボランティア・セクターについて、「多元的セクター」という呼称を提唱しており、その問題提起の重要性については後に論じるが、新たな「経済」の動向を論じる時、ボランティアの問題が重要であることを指摘している。「アジア」との関係でいえば、経済学的文脈

で、「非近代的」と見做されてきた契約に基づかない「労働」の問題は、新しい文脈のなかでとらえなおしが迫られている。ミンツバーグは、社会的なバランスの回復の問題として論じているが、さらに一步踏み込んで、「経済」そのものの新たな「かたち」について触れる可能性を秘めているように思われる。

ポスト資本主義体制に不可欠な要素として、ドラッグーやミンツバーグは、ここである、多元的なボランティアセクターの意義を評価している。しかし、この位置づけは、既存の公共セクター、民間セクターを絶対視した文脈を前提とするもので、こうした二つのセクター自体の位相が大きく変わるニューエコノミー化の流れのなかで、多元的なボランティアセクターの位相についても再検討の余地が出てくる。

リフキンが「共有型経済」と呼ぶもののなかに、一部は取り込まれていくし、労働からの解放後の主たる営みのなかにもその多くが取り込まれていくし、ポスト政治とでもいうべきグローバルなエコシステムのメンテナンスにかかわる様々な役割としても取り込まれていくことになるだろう。

ボランティアという呼び方自体が消えていく一方で、そうした活動自体は、これまでに類をみなかったほどの規模に膨張していく。

ミンツバーグの議論の下敷きにある事柄自体が消失していくのであり、光を当てるべき対象は、その消失にともなって、そこに置き換わっていく事柄の方だと思われる。通貨、貨幣を媒介とする経済システムの減退であり、労働からの解放に直面して招来する新たな経済システムの躍動への注目である。

また、こうした新しいシステムは、世界システムの変更、より精確には、モデルの変更をしなければいけないような変化に直結する。近代世界システムの変更であり、「グローバル・コスモポリタン社会」への移行であり、近代世界が、旧近代世界ないしは、後期文明と呼ばれるようになってしまうということでもある。「アベコベ」の世界が到来する観がある。ただ、人類史的な観点からは、これこそがトレンドと呼ぶべき様相だということになる。

最後になったが、前項で触れた「底辺からの直接的な移行の可能性」とでも呼ぶべき点もまた、ここで論じた文脈のなかでも、十分顧みられるべき問題系であることはいうまでもない。

4. 「アジア」と「経済」の行方

「アジア」は、アダム・スミスの『国富論』以来、「近代経済」を描く際に陰影を与えるための敵役として扱われてきたし、イマニュエル・ウォーラスティンが示したような、西欧中心の「近代世界経済」を支える周辺部として、そして「近代経済」自体に陰影を与える実体として、組み入れられてきた。「経済」にかかわる理論体系のなかで、「アジア」は「近代経済」に陰影を与えるものとして、とらえられてきたことになる。いいかえれば、「近代経済」の特徴を示す際に「アジア」が、重要な役割を担わされてきたということもできよう。もし、「近代経済」が変貌すれば、そこでの「アジア」の役割も大きく変わらざるをえないし、「アジア」自体のとらえかたが大きく変われば、「近代経済」のとらえ方自体が大きく変わらざるをえなくなる。つまり、「アジア」に焦点を当てる

ことで、「近代経済」したがって「経済」自体の変化をとらえるための考察がより具体的に進む可能性が生じることになる。

1990年前後以降、「アジア」の「経済」をめぐる事情は一変した。例えばダニエル・コーエンが描くように、中国を中心とした「アジア」の「経済」の次元での台頭は、これまでの経済学的な常識を覆してしまったし、ニール・ファーガソンによれば、アダム・スミスの記述とは対照的に、今や、西欧こそが「アジア」に代わって「定常状態」に陥っており、逆に、これまでの西欧の位置に「アジア」こそが納まってしまったということになる (Cohen 2014; Ferguson 2013)。「アジアの復興」という見方もこうした事情の変化に後押しされて生じている。

グローバル化のなかでの「アジア」の経済成長は、こうした「世界像」の反転を促すことになる。さらに、グローバル化と、グローバル化を支え、グローバル化に支えられる、スマートテクノロジーやニューエコノミー化の動きは、地球規模の気候変動の問題などと呼応しながら、そもそも、「停滞」と「成長」の対立モデルの無意味さを上書きし続けるようにさえなっている。ファーガソンのかつての中国と現在の西欧とが、「定常状態」において入れ替わってしまったとの指摘についても、そもそも、その図式自体が、当てはまらなくなっていることにこそ気づくべき論点があるのであり、経済学的文脈における「アジア」の意味づけ自体の転換の「深さ」に思いを向ける必要があるだろう。

そもそも、「アジア」とは、クリフォード・ギアツが指摘しているように、恐らくともに論じるには、大きすぎる対象である (Geertz 2000)。それにもかかわらず、経済学をはじめ、「オリエンタリズム (東洋学・アジア学)」は、これを当然のことのよう、論じることが可能な対象として扱ってきた。最近の経済学的研究の大勢はこうした点からは、距離があるのだとしても、それにもかかわらず、経済学が「横に拡がる科学」(ダニ・ロドリック)だとすれば、経済学は、やはり、「オリエンタリズム」としての顔を、今においても、もつといえるかもしれない。また、今日でも多くの議論において、実質的に、「文化」を本質論的にとらえ、「民族」を本質論的にとらえ、その延長に「アジア」が位置づけられるような仕組みが作用し、また、教条主義的な理解の下での「説明」のなかで、「世界経済」や「国際経済」や「アジア経済」や「日本経済」が位置づけられる場面にいくわすことも少なくない。少なくとも、そうした議論は、「オリエンタリズム」的だといえよう。いずれにせよ、エドワード・サイードが提起したディスクールとしての「オリエンタリズム」の問題は、少なくとも、こうした経済学的な文脈における「アジア」の次元において、いうまでもなく、典型的に当てはまるということになる (Saïde 1994)。

そこで最後に、「アジア」に関する転換の一例として、経済学がとらえてきた「オリエンタリズム」的な「アジア」も、オールドエコノミーを主眼におく「経済」も、近代世界システムの国際システムも、最早、過去の遺物でしかなくなりつつあるという点について少し違った角度からの考察に触れておきたい。それは、かつて、原洋之助が『クリフォード・ギアツの経済学』(Hara 1985)で主張していた、ギアツの「経済過程」に関する研究が、「アジア経済」の理解にもたらずインパクトについての見解に絡むものである。

原は、ギアツの研究が、「アジア経済」の「現実」に即した「経済学」の構築に貢献するものとして高く評価しているが、そもそも、ギアツの眼差しは、原のものとは大きく異なるものである。

ギアツの関心は、その時点でのジャワ人やインドネシア人の生活が行われたその場の「世界」そのものについてにあり、そのなかで、「経済過程」に注目することにある。当然のことながら、これまでの経済学的な視点とは、あくまでもその逆方向に向けられる。ギアツは、多くの経済学者の議論が、「エコノミズム」であり、近経、マル経の別なく、「文化」を外部化させ、経済開発に対して「障害としての文化」か「刺激としての文化」を問うのだと指摘する。それに対して、原は、ギアツによるインドネシアの「経済過程」に関する研究を、通常の経済学が見落としてきた「社会に埋め込まれた経済」を具体的にとらえる「経済学」としてきわめて高く評価する。

原は、「文化」を「経済」の外部にあるものだが、「経済」は社会に埋め込まれたもので、「文化」の影響を色濃く受けたものなのであり、それぞれの社会固有の「文化」への理解なしに十分な「経済」の理解も不可能だと考える。「文化」の多様性を認め、守ることも、とりわけ非西欧社会では重要な点だとしており、「アジア」には「アジア」独自の「経済」があり、その発展があるべきだと考えていた。「ギアツの経済学」は、こうした「アジア」独自の「経済」をとらえるための特異な「経済学」としてとらえられることになる。

それに対して、ギアツ自身は、自らの議論について「経済学」と呼ぶことを避け、自身のインドネシアにおける「経済過程」に関する研究は、インドネシア人の「生活のかたち」のなかでその「経済過程」をとらえ「文化」の「非外部化」を行うことだと述べ、そして、「経済学」とは、結局のところ、「エコノミズム（経済偏重主義）」なのであり、「文化」を「外部化」し、経済の開発・発展にとって、「障害としての文化」か「刺激としての文化」かを問う、自身の研究とは凡そ真逆の方向性をもったものだと言明している（Geertz 1984; Geertz 1940 [池本訳]）。その意味で、原のギアツ理解は、ギアツの意向にそうものとはいえないということになる。

改めて、原の視点について述べれば、ギアツの意図と三重にすれ違う。まず、「文化」を外部化する。さらにその際に、ギアツのいう「文化」については関知しないことになる。また、原は、経済学主流の問題点を指摘し、新しい潮流などへの期待を示すが、結局、本質論的な文化概念と、サブスタンシャルな経済理解という、ギアツが避けようとする「文化」と「経済」の見方から一歩も出ていない。一見、同じことを目指しているように映るのだが、両者は、いわば、異次元の議論の場に立っていることになる。

ギアツが、アメリカ経済学会で呼びかけた通り、こうした古い枠組から逃れて、より精緻な「経済過程」理解の道が、ギアツの眼差しと「経済学」との間で垣間見られることになるのだが（Geertz 1978）、残念ながら、その途上に、原の姿はないということになる。

そして、ギアツのアプローチの真価は、皮肉にも、きわめて逆説的なことながら、「アジア経済論」の進展に寄与するという点に見出すことはできないのである。この点において、原との乖離は決定的なものとなる。

経済学的な意味での「アジア経済」自体が、最早、無意味化しつつある。それでも、こうした問

題が健在であるかのような議論が可能だとすると、その答えは、行動経済学の教えるところの「体系的バイアス」の問題というほかあるまい。

つまり、ギアツ流の「経済過程」への言及は、未知の「経済過程」へのかかわりの際の有力なアプローチというほかないのであり、「アジア経済」の意味が事実上消失する状況においてこそ、つまりは、現時点で、次のアンソニー・ギデンズのいう新たな摸索の具体例になる可能性があるということではなかろうか。

多分、われわれは、新たな社会学的な理論の構築の重要な段階に居合わせようとしているのではなかろうか（Giddens 2001：680）。

つまり、今起こっていることが「社会変動」であるのだとすれば、現在は、かつて、大きな経済的、社会的な変動のなかでマルクスやウェーバーやデュルケームらが試みたのと同様に、われわれもまた、新たな社会科学的な取り組みに向かうべき時だということになるからである。つまり、何もかもが変わってしまっただけで何らおかしくはないということになる。

参考文献

- ・ Baldwin, Richard (2016) : *The Great Convergence: Information Technology and the New Globalization*, Belknap Press: An Imprint of Harvard University Press. (遠藤真美訳『世界経済 大いなる収斂 ITがもたらす新次元のグローバリゼーション』、2018年、日本経済新聞社。)
- ・ Brynjolfsson, Erik and McAfee, Andrew (2014): *The Second Machine Age: Work, Progress, and Prosperity in a Time of Brilliant Technologies*, New York, W.W.Norton & Company. (村井章子訳『ザ・セカンド・マシン・エイジ』、2015年、日経BP社。)
- ・ Cohen, Daniel (2014): *Homo Economicus: The (Lost) Prophet of Modern Times*. Translated by Emanuel, Susan, Polity Press. (林昌宏訳『経済は、人類を幸せにできるのか?—〈ホモ・エコノミクス〉と21世紀世界』、2014年、作品社。)
- ・ Downes, Larry and Nunes, Paul (2014): *Big Bang Disruption: Business Survival in the Age of Constant Innovation*, UK, Portfolio Penguin. (江口泰子訳『ビッグバン・イノベーション』、2016年、ダイヤモンド社。)
- ・ Drucker, Peter F. (1994): *Post-Capitalist Society*, Routledge. (上田 惇生訳『ポスト資本主義社会』、2014年、ダイヤモンド社。)
- ・ Ferguson, Niall (2013): *The Great Degeneration: How Institutions Decay and Economies Die*, The Penguin Press. (櫻井祐子訳『劣化国家』、2013年、東洋経済新報社。)
- ・ Florida, Richard ([2012] 2014): *The Rise of Creative Class*, New York, Basic Books. (井口典夫訳『新クリエイティブ資本論：才能が経済と都市の主役となる』、2014年、ダイヤモンド社。)
- ・ Florida, Richard (2008): *Who Is Your City: How the Creative Economy Is Making Where to Live the Most Important Decision of Your Life*, New York, Basic Books. (井口典夫訳『新クリエイティブ都市論：創造性は居心地のよい場所を求める』、2009年、ダイヤモンド社。)
- ・ Friedman, Thomas, L. (2006): *The World Is Flat*, England, Penguin Books. (伏見威蕃訳『フラット化する世界 上・中・下』、2012年、日本経済新聞社。)

- ・ Geertz, Clifford (2000): Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics, Princeton, Princeton University Press.
- ・ Geertz, Clifford (1984): "Culture and Social Change: The Indonesian Case", *Man New Series*, Vol. 19, No. 4, pp. 511-532.
- ・ Geertz, Clifford ([1983] 2000): Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology, U.S.A., Basic Books.
- ・ Geertz, Clifford (1978): "The Bazaar Economy: Information and Search in Peasant Marketing", *The American Economic Review*, Vol. 68, No. 2, Papers and Proceedings of the Ninetieth Annual Meeting of the American Economic Association, pp. 28-32.
- ・ Geertz, Clifford (1973): The Interpretation of Cultures: Selected Essays, New York, Basic Books.
- ・ Geertz, Clifford (1968): *Peddlers and Princes: Social Development and Economic Change in Two Indonesian Towns*, University of Chicago Press.
- ・ Geertz, Clifford (1940): *Agricultural Involution: The Processes of Ecological Change in Indonesia*, University of California Press. (池本 幸生『インボリユーション—内に向かう発展 (ネットワークの社会科学)』、2001年、NTT出版。)
- ・ Giddens, Anthony (2001): Sociology: 4th Edition, Cambridge, UK, Polity Press.
- ・ Giddens, Anthony ([1999] 2003): Runaway World: How Globalization Is Reshaping Our Lives, New York, Routledge. (佐和隆光訳『暴走する世界：グローバリゼーションは何をどう変えるのか』、2007年、ダイヤモンド社。)
- ・ Gratton, Lynda (2014): The Key: How Corporations Succeed by Solving the World's Toughest Problems, New York, McGraw Hill Education. (吉田晋治訳『未来企業：レジリエンスの経営とリーダーシップ』、2014年、プレジデント社。)
- ・ Handler, Richard (1991): "An Interview with Clifford Geertz", *Current Anthropology* 32-5, pp.603-613.
- ・ Hara, Yonosuke (1985): *Geertz no Keizaigaku [Economics of Clifford Geertz] (in Japanese)*. Tokyo: Libro Port. (原 洋之介『クリフォード・ギアツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』、1985年、リポート。)
- ・ Hirschman, Albert O. ([1977] 2013): *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism Before Its Triumph*, Princeton University Press. (佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学 (新装版)』(叢書・ユニベルシタス)、2014年、法政大学出版局。)
- ・ Karneman, Daniel (2012): Thinking Fast and Slow, UK, Penguin Books. (村井章子訳『ファースト&スロー—上・下』、2014年、ハヤカワノンフィクション文庫。)
- ・ Kotler, Philip (2015): *Confronting Capitalism: Real Solutions for a Troubled Economic System*, Amacom Books. (倉田幸信訳『資本主義に希望はある—私たちが直視すべき14の課題』、2015年、ダイヤモンド社。)
- ・ Leach, Edmund (1990): "Aryan Invasions over Four Millennia" in Ohnuki-Tierney, E. (ed.), *Culture through Time, Anthropological Approaches*, Stanford, Stanford University Press, pp.227-245.
- ・ McGrath, Rita G. (2013): The End of Competitive Advantage: How to Keep Your Strategy Moving as Fast as Your Business, Boston Massachusetts, Harvard Business Review Press. (鬼沢忍訳『競争優位の終焉：市場の変化に合わせて、戦略を動かし続ける』、2014年、日本経済新聞社。)
- ・ Mintzberg, Henry (2015): *Rebalancing Society: Radical Renewal Beyond Left, Right, and Center*, Berrett-Koehler Publishers. (池村千秋訳『私たちはどこまで資本主義に従うのか—市場経済には「第3の柱」が必要である』、2015年、ダイヤモンド社。)
- ・ O'Neill, Jim (2011): Growth Map: Economic Opportunity in the BRICs and Beyond, New York, Portfolio Non Fiction. (北川知子訳『次なる 経済大国』、2012年、ダイヤモンド社。)

- ・ Ong, Aihwa (2006): *Neoliberalism as Exception: Mutations in Citizenship and Sovereignty*, Kansas City, DukeUniversityPress (加藤敦典・新ヶ江章友・高橋幸子訳『〈アジア〉、例外としての新自由主義』、2013年、作品社。)
- ・ Pomeranz, Kenneth and Topik, Steaven (2005): *The World That Trade Created: Society, Culture and the World Economy, 1400 to the Present*, London, Routledge. (福田邦夫訳『グローバル経済の誕生：貿易が作り変えたこの世界』、2013年、筑摩書房。)
- ・ Ray, Paul H. and Anderson, Sherry R. (2001): *The Cultural Creatives: How 50 Million People Are Changing the World*, Broadway Books.
- ・ Reich, Robert B. (2015): *Saving Capitalism: For the Many, Not the Few*, New York, Alfred A. Knopf. (雨宮寛他訳『最後の資本主義』、2016年、東洋経済新報社。)
- ・ Redclift, Michael R. and Woodgate (eds.) (2011): *The International Handbook of Environmental Sociology*, Second Edition, UK, Edward Elgar.
- ・ Rifkin, Jeremy (2015): *The Zero Marginal Cost Society: The Internet of Things, the Collaborative, Commons, and Eclipse of Capitalism*, New York, Palgrave Macmillan. (柴田裕之訳『限界費用ゼロ社会』、2015年、NHK出版。)
- ・ Rodrik, Dani (2016): *Economics Rules: The Rights and Wrongs of the Dismal Science*, W.W. Norton & Co. Inc. (柴山 桂太・大川良文訳『エコノミクス・ルール：憂鬱な科学の功罪』、2018年、白水社。)
- ・ Saide, Edward W. ([1979] 1994): *Orientalism*, New York, Vintage Books. (今沢紀子訳『オリエンタリズム上・下』、2009年、平凡社ライブラリー)
- ・ Sandel, Michael J. (2013): *What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets*, Farrar, Straus and Giroux. (鬼澤忍訳『それをお金で買いますか』、2014年、ハヤカワ・ノンフィクション文庫。)
- ・ Sassen, Saskia (2001): *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton, Princeton University Press. (伊豫谷登士翁監訳『グローバル・シティー：ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』、2008年、筑摩書房。)
- ・ Satoh, Kenichi (2008): "Creative Lifestyle and the Public Sphere: A Case Study of Tokyo", *Asia Japan Journal*, No.03, pp.31-38.
- ・ Steger, Manfred ([2003] 2017): *Globalization: A Very Short Introduction*, Oxford, Oxford University Press. (櫻井公人訳『グローバリゼーション』、2010年、岩波書店。)
- ・ Suchman, Lucy (2011): "Anthropological Relocation and the Limits of Design", *Annual Review of Anthropology* 40, pp.1-18.
- ・ Watts, Duncan J. (2012): *Everything Is Obvious: Why Common Sense Is Nonsense*, New York, Atlantic. (村井章子訳『偶然の科学』、2014年、ハヤカワノンフィクション文庫。)